



小林勇文集

第二卷

筑摩書房

小林勇文集 第二卷

一九八三年八月二十日 第一刷発行

著者 小林 勇

発行者 布川角左衛門

発行所 筑摩書房

101東京都千代田区神田小川町二ノ八

電話 〇三(二九一)七六五一営業部

〇三(二九四)六七一一編集部

振替 東京六四一二二三

印刷所 精興社 製本所 鈴木製本

乱丁・落丁本の場合は御面倒ですが小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

目次

蝸牛庵訪問記

*

懷遠

亡友の子どもたち

詳細目次

解題

口絵・白牡丹

1

289

316

一九七四年作

蝸牛庵訪問記

——露伴先生の晩年——

「蝸牛庵というのはね、あれは家がないということさ。
身一つでどこへでも行ってしまうということだ。昔も
蝸牛庵、今もますます蝸牛庵だ。」

——昭和十三年八月九日談——

記録第一頁

昭和十一年二月十一日

十和田湖へ行ったとき、秋田で食った鍋のことを思い出し、先日東北大学の寺崎修一教授が送ってくれたシヨツツルをもって、先生の身体のことを心配しながら午後三時に伝通院へ行った。すぐに居間に通された。先生は文子^{あや}さんと話をしていた。その場の空気ではぼくは入っては悪いのではないかと思つたが、先生がそれを察して、かまわぬから入れというので室に通つた。文子さんの顔色が悪かつた。ぼくが先生ととりとめのないことをしばらく話していたら、文子さんがずっと立って室を出て行つた。すると先生が「文子」と呼んだ。文子さんが帰つて来て坐ると、先生が話し出した。二人はどのくらい前から話していたのか見当はつかないが、先生はぼくといつも話すような呑気な調子でなかつた。

「変なのといるとこちらも変になつてくる。病人と一緒にいると健康な者も病人のようになってくる。ずぼらな怠け者と一緒にいるとずぼらになつてくる。主人が怠け者なら召使も怠け者になつてくる。ここで本当にしっかり自己を守らなくてはいけない。」

「身体を大事にして食べ物などもしっかりとしたものを食べなくてはいけない。なにも贅沢をしなさいというのではないが、人間の身体に必要なものだけは摂るようにしなくてはいけない。」

「努めて加餐せよということがある。努力して食べることだ。食べられないからといって食べずにい

れば、いよいよ食べられなくなって身体は弱ってしまう」といって、それから孔明の故事をひいても十分に摂ることの必要なことを話した。

「わたしはおかずのないときはごはんを余計食べます。うまいおかずがたくさんあるときには、ごはんなんか多く食べる必要はないからです。」

「何事でも時というものがある。風と潮とがうまくいかなければ、どんなに上手な漕ぎ手だって、いたずらに疲れるだけだ。ちゃんと時を待っていないではならない。待ってるだけではいけない。その間に腹ごしらえをし、身支度をしているのだ。」

「女の人は男にくらべて損な身体をもっている。そのときには精神が従になって、血が主になる恐れがある。健全なときでさえ、あやまった考えをおこすことがあるのに、ましてそういうときにはほど用心してかからぬとんでもないことをしてしまう。」

「出歩きができるようになったら、早速医者にかかってちゃんとしないではいけない。」

文子さんに先生が話しているのをぼくは黙ってきいていた。文子さんが自分の家へ帰ってから、例によって世間話をした。

「シナという国はへんでこになってきたよ。もう十年もすると、あれはどんなふうになってしまうかわからないね。」

「昨夜人が来ての話に、アメリカでは毒ガスの研究に千二百万円も出しているというではないか。どうも毒ガスなんて変なものを考え出して困りものだ。」

「血圧なんか気にしないでいい。ぼくも一郎が悪くなったときには、ぼくの血圧もむやみに高くなっ

たので、医者に入院ですすめられたが、どうも親子で入院しているなんてよくないからやめた。」

「豆腐がらを水でよく洗って水晶のようにして、さよりを酢にしたものにそいつをまぶして食うとなかなか上等だ。酒の肴にいいよ。」

「狩野亨吉さんは七十以上で元気がいいそうだが、あの人は変わった人だ。ぼくも元気をだしていなくてはならない。」

あの人くらい本を読むと宗教なんか馬鹿らしいというのは当り前だ。あんなに本を読んでいて著述がないのも変っている。

狩野さんに書画の鑑定を頼むとみんな偽物になってしまうので商売人が喜ばないそうだが、面白いね。

シナの手妻の本を琳琅閣から買ったそうだが、七十すぎの年寄が手妻の本など買うなんてよほど奇妙だよ。」

「寺田はもう十年も生かしておきたかった。そうして専門を少し狭くしてやったら、きっともって面白い仕事を残したろうと思うね。言葉のことをやったり、映画を見たり、なんでもやってみるのは心にゆとりがなかったせいだ。ゆとりがあって生活が平和なら、そんなにいろいろのことをやらなくていいからね。」

辞して帰ろうとしたら、文子さんのことを話しました。三橋家がひどくなって、おまけに夫婦の間もまずいので、文子さんが帰るといふ話が始まっているのだ。

「ぼくは年寄だしするから、なに、ひらりと身をおかわそうとすればできるのだが、苦しみをよけて通

るといふのは多くの流儀でないし、社会にちゃんと生きる者のとるべきことでない。じっと苦しんでそれを通していかなくてはならない。けれど、女は弱い者で、実に可哀相で仕方がない。」

「君も知っているように、去年から金の方も心配しているのだが、そんなことは共に苦しむのだからなんでもないが、精神の問題になると実に弱る。」

私の「蝸牛庵訪問記」はこのような調子で書かれている。翌日の十二日、同じ月の二十日、二十一日は電話で話し、二十四日にまた蝸牛庵にいつている。しかし、丹念に記録したときと、二、三回とばしたり、数カ月全然記録しなかったりしているから、連続した記録にはならないが、「訪問記」を主軸にして、他のいくつかのノートの助けをかり、先生にお目に掛けてから、お別れするまでのことをできるだけ書くことにした。

最初の訪問

一九二六年（大正十五年）の春、私は岩波書店の編集部員としてはじめて露伴先生にお目にかかった。

先生は向島の蝸牛庵を人手に渡したのち、一葉女史の弟礫川堂書店主人が急遽さがした伝通院の近くの家に住んでおった。その家は伝通院前の電車の停留所から竹早町の方へ向って五十米もいったところを右へ入り、すぐにまた右に折れた袋小路の一番奥の左側にあった。それは伝通館という映画館

の真裏にあたる二軒建の長屋であった。

たしか朝の九時ころであっただろう。私はその家の門をあけた。玄関の硝子戸まで三尺ほどの距離があるだけであった。玄関へ出て来た夫人が、「その」と、左手のくぐり、ようのものを指して、「庭へお廻りなさい」といった。それは庭とはいうが名ばかりで、塀と縁側までの間は一間ほどしかなかった。私の目の前にいきなり先生が出て来た。そしてそこにあった手水鉢で手を洗った。二日前に編集部員になり、末弘嚴太郎博士を訪問したのが最初で、先生を訪問したのが編集者としての二回目の仕事であった。半白の髭と、赤味のかかった顔の色、やや脹れぼったい眼、そしてなにより、不機嫌な顔でじろりと見られたというのがこのときの印象である。雑誌「思想」の原稿催促であったが、簡単にまだできていないといわれた。そのとき玄関に人が来た。夫人が弾んだ声で「谷崎さんがおみえになりました」と先生にいった。そして私が庭先に茫然と立っているとき、丸顔の潑刺とした感じの谷崎潤一郎氏は、慎ましく先生のあとに従って階段をきしませて二階へ上って行った。

その後私はこの家にたびたび行った筈であるが、上へあげられたことはなかった。その年の十一月、一郎さんと今でも呼ばれている一人息子の成豊さんが亡くなって、それを兄と一緒に悔みにいったとき、はじめて靴をぬいだ。私の長兄は今信州の田舎に引込んでいたが、そのころは東京にいたり、雑誌の記者や経営をしていて、先生のところへ繁く出入していたのであった。一郎さんが亡くなったことは、岩波茂雄が私に告げた。そのときはすでに葬式も済んだ後であった。私は巣鴨に住んでいる兄にそのことを知らせに、夜になって行った。兄は池の端の宝丹で香を求めて伝通院へ行ったのである。通された二階はたしか八畳であったと思う。本がたくさん置いてあった。その晩私たち兄弟は、遅く

まで先生と酒を飲んだ。兄が、二十歳で亡くなった一郎さんのことをいろいろと話し、そのうちに一郎さんが女を知っていたということを知ると、先生が破顔一笑した。そのことが夜遅くまでいたことと共に記憶に残っている。

昭和二年

新しい蝸牛庵

先生は数え年六十一歳である。向島の蝸牛庵から映画館の裏へ越された先生も、さすがにその家は手狭で、またひどいので適当な家を探しておった。それをしきりに心配したのが岩波茂雄である。私は岩波の命を受けて先生の家を探して歩いた。どういう条件であったかはつきり記憶していないが、ともかく私のような若僧が露伴の家を探すということが滑稽事であった。いくつか報告したがむろん問題にならなかった末に、市ヶ谷の近くに見付けた家にはともかく行ってみようということになった。しかし先生と岩波はその家に入ってすぐに出てしまった。私の家探しは全然落第であった。その年の夏だろうと思う。先生はようやく新しい借家に移った。

その家は伝通院の門にむかって右へ折れてゆくと、道の真中に大きな榎のある傍の家である。映画館裏の前の蝸牛庵からここまでは僅かな距離である。私は引越しの手伝いにいって、はりきって働いた。先生はその日どこかへ行っていなかった。八代夫人もまだ若く、文子さんは結婚前で太ってあった。私は先生が立派な家へ入れたと思って喜んではいいたが、あとで岩波茂雄から、先生があの家へお入りになるのは残念だといわれて驚いたのであった。それでもその家はあらたに離れと称する上下二間をつけたから、先生のこんどの家は室数にして二階が三間、下が五間であった。この引越しの手伝いから私は急速に幸田家に親しくなった。

或る夜私が神保町の岩波書店小売部の店先にいると、幸田八代夫人と文子さんが私を訪ねて来た。そして引越し手伝いの礼であるといって小さな包を置いていった。ひらいてみるとレースで編んだ玉虫色のネクタイであった。その少し派手らしく見えるネクタイは、田舎者の皮をまだぬぎきらない私には気に入らなかった。それは誰か友人のものになったのである。

月も日も記録にないが、或るとき新しい蝸牛庵を訪れると私は玄関払いをくった。取次ぎの女中さんの困惑の顔色をおぼえているが、それは世なれない私のむくれ方がひどかったからにちがいない。そのつぎに先生にお目に掛ったとき、私は玄関払いをくらった不平を述べた。先生は大いに笑って、あの時は急ぎの原稿を書いていたのだから堪忍したまえといい、「これからはもうしないよ」といった。

昭和二年という改造社の山本実彦氏がいわゆる円本をはじめた年である。そして出版界は円本の嵐の中に捲きこまれた。岩波書店はそれに対抗して岩波文庫をはじめた。そのころには私は先生にも

はや甘えるような状態になっていた。岩波文庫に先生のものが最初に入ったのは「五重塔」である。これは明治二十五年に嵩山堂から出版され、そのときは最初印税契約であったが、のちに本屋の奸計にのせられて二十円で著作権を売ってしまったというのである。その後先生はこの本の版権を買いもどした。その使者は春陽堂の古い店員木呂子斗鬼次氏であったという。先生は二十円で売ったのだから二十円で買ひもどせると思ったのに、本屋は百五十円を要求したという。このことを先生は私に笑いながら話した。岩波文庫がはじまるときに、すぐに「五重塔」を入れてくれるようお願いして先生の承諾を得た。先生は「五重塔」を私と約束したので、その後改造社と春陽堂の円本が互いにそれを欲しがったが、入れることを承諾しなかった。しかし、この年の暮に私および岩波書店のすすめで二つの全集に甲乙なく入れるようになった。私は先生の義理固いのを深く感じた。

或る日先生のところへ行くと玄関に靴が三足並んでいて、先生は留守だと文子さんがいった。それでもお客さんがいるではないかと靴を指して私がいうと、文子さんは改造社から検印をとりに来ていたのだといった。そして文子さんは「なんでも三十万とか印を捺すのだからたいへんよ」といった。

昭和三年

昭和三年

蝸牛庵の庭

先生は数え年六十二歳である。この年のことはあまり覚えていないが、岩波書店で前年の暮計画した岩波講座「世界思潮」に、墨子のことを書いて貰ったときのことを思い出す。お願いにいったとき先生は留守であった。玄関で文子さんが用件を言えといった。私は先生にお願いに來たのだからあなたに言う必要はない、それともあなたが引受けてくれるなら言いましょうといった。文子さんも勢よく引受けるというので、ボクシのことを書いてもらいたいのだと話した。その後先生のところへ行くと、先生は私のお願いしたことについて、「ボクシはなんでも教会の牧師だろうと文子がいうので、君は奇妙なことを言う人だと思っていたよ」と笑って言った。この墨子は七月に出來た。

このころ先生のところへはたびたび伺ったが、もはや面会謝絶は約束だから食らわされなかった。或るとき私の兄が名古屋から取りよせたバラの苗を先生に贈りたいというのでその使者になったことがある。

蝸牛庵の庭はあまり広くはなかった。先生の書齋は二階にあって机は道路に面した方の隅にあった。道には大きな榎があり、その榎が先生の書齋に近々と枝をひろげていた。或るときには室がそのために青いような感じであった。書齋の下の室が客間になっていた。そこと鉤の手に茶の間とそれに続いた室があるのだ。往来との境は板塀になっている。板塀にそって交番があった。蝸牛庵の狭い庭は大正十二年の大地震で焼けた瓦や石塊の上にわずかに土がのっているのだから瘠せていた。先生はそれを丹念にならして次第に美しい庭に仕上げていった。

十二月文子さんが新川の酒問屋、三橋家の次男幾之助氏と結婚した。私はそのことを知っていたが、先生からは一言も聞かなかった。岩波茂雄がやや不満そうに、先生はどうしてそういうことを人と言わないんだろうと言った。

この年の秋、私は岩波書店を退いた。二十を越したばかりの私が、新しく出版屋をはじめようというのであった。そのころ私は本郷真砂町の下宿屋にいて、毎日のように三木清、羽仁五郎などに会っていた。先生は私の行為を少しも批判も非難もしなかった。いい気な私は絶えず先生のところへ行っていた。そのころ先生はけっしてジャーナリズムの世界で寵児ではなかったから、また先生は気むずかしい人だとされていたから、来客は多くなかった。しかも一郎さんは亡くなり、文子さんが嫁いで、家には氣に入らない夫人と女中ばかりであったから、私のような無茶苦茶が絶えず行っても、別段邪魔にも思わなかったのかも知れない。

昭和四年

書店の名

先生は六十三歳。私は本郷の下宿を出て、神田の一ツ橋に一軒借り受け、事務所をもった。寺田寅彦の「万華鏡」、三木清の「社会科学の予備概念」の二冊がすでに本になりそうになっているのに、書店の名前がきまらなかった。もっとも、私の心中には先生に名付けてもらおうということがきまっていたのであるが、そのことはせっぱ詰るまで先生に持ち出さなかったのである。或る日の午後、先生の書齋でそのお願いをしたところが、早速引きうけて「タチャというのはどうだい」といった。変な名前を言い出したと思っていると、先生はひとりで面白そうに笑いだした。吉原にタチャという小間物屋があって、遊びに行く連中が女郎の機嫌をとるために、ここから簪などを買って行く。そういう店だったと言い、なにかトツカピンでも売る店のようではないかとひとりで笑っている。私は腹を立てて、冗談ではないと食ってかかった。先生はそうかえと言って急にまじめな顔になり、いろいろの名前を考えて言うのであるが、それはどこかにすでにそういう本屋があったり、私の氣に入ら